

白金校舎ボランティアセンター報告

1. 通常の相談業務や協力について

今年度より、スタッフが1名増員されたことで、白金ボランティアセンター（以下、白金ボラセン）の掲示やレイアウトが充実し、日常の学生相談もゆとりを持って対応できるようになった。雑誌や書籍も増やし、図書の充実を図った。ボランティア相談では白金近隣情報をまとめたチラシが好評で、これをもとに相談に訪れる学生が多く、実際の参加につながった。改訂を重ね2010年1月26日現在、Vol. 9まで発行している。学生が持ち寄るボランティア情報掲示板の利用も増え、公認・非公認・インカレを問わず様々な情報が発信された。その他、国際ワークキャンプに参加した学生有志の体験報告会のサポート、明治学院共通科目・アカデミックリテラシー研究2への授業協力、学生スタッフとコーディネーターによる明治学院中学校への出講なども行った。学生の利用傾向は、ボランティア紹介や相談のほかに、ボランティアサークルの運営やマネージメント、ボランティアを続ける過程で生まれた悩みや方向性（ボランティアって何だろう？ボランティアとして自分はどう行動すればいいのだろうか？等）に関する相談や、横浜校舎に在籍する学生や活動の拠点が横浜にある学生などの来室や相談も増え、在籍校地ではなくニーズに合わせて利用する学生が顕著になってきた。その他、進路に関する相談も増えた。

2. 白金学生スタッフ及び白金ボランティアセンター主催企画について

2008年度報告書の白金報告では、チーフ以外の学生スタッフも含める共同執筆の形を初めて試みたのだが19ページのうち、学生執筆分は12ページであり、筆者は7ページも書いていた。それから一年、今年度の白金報告は28ページに増え、13名の学生スタッフによって23ページ執筆した。学外からも寄稿いただき、盛りだくさんの仕上がりになった。したがって今年度、筆者の出る幕はほとんどなく、なんとか3ページを頂けたと言っても過言ではない。単純な比較であるが学生主体のセンターにより近づけたのではと感じる。2009年度は、学生の持つ力と可能性を存分に感じさせてもらった1年だった。学生たちの報告でも多く挙がったが、今年度様々な経験ができ、活動の幅を広げることができたのは、様々な人とのつながりと日々の小さく地道な活動の蓄積があったからであった。「おもろい出会い」を目指し、そこから生まれたつながりを活かしてがむしゃらに邁進した2008年度を素地に、2009年度はそこから見出した希望を具現化し、多くのつながりを広げた年だった。活動内容の詳細は学生報告に委ねるとして、本頁では全体の流れと特長について整理する。春学期は、横浜在籍の学生（国際学部）が白金学生スタッフとして登録し、白金ボラセン学生スタッフは両校地における全学的な活動に発展した。そして、各プロジェクトの基盤が強化され、活動が具体化し、メンバーが増加した。それに伴い、プロジェクト間の連携が活発になった。こうして、白金ボラセンは以前にも増して人の出入りが激しくなり、座る場所もなく入口で人が溢れたり、作業場所が足りず隣の会議室を借りたりすることもしばしばだったが、2009年夏、拡張工事が施され9月から新たなセンターに生まれ変わった。拡張するにあたって出

来るだけ物を置かない設えをお願いし、可動式の収納可能な机や椅子を増やしてもらい、部屋の一番奥は投影ができるように白壁にしてもらった。こうして生まれ変わった白金ボラセンを早速活用しようと、春学期学生スタッフ研修会（詳細は32～33ページを参照）でいくつか企画が立案された。こうして実施したりリニューアル記念企画が、白金合コン（詳細は30～31ページを参照）、「めいがくのすきま展（詳細は41ページを参照、以下すきま展）」、「トークイベント」だった。白金合コンの詳細は学生の報告をご参照いただき、本頁ではボランティアセンターが主催したすきま展とトークイベント（両企画共に10月5日～12月18日開催）について報告する。すきま展は、こまどり社を主宰する仮屋崎健氏の全面的な協力のもと「ボランティアは隙間産業」という共通価値観から出発した企画だった。そして秋学期期間中、枠に囚われない様々な手法で、仮屋崎氏は新生白金ボラセンをフィールドに、ボランティアと隙間を縦横無尽に表現し続けてくださった。観客の反応を観察して非常に面白かったのは、彼の実践を「わからない」とする反応と、「わからないけどとりあえず向き合ってみる」という2つの反応があったことだった。前者の場合、その選択はとても「楽」であるが、そこで終了である。せっかくの出会いと大学という恵まれた場において自らの思考を停止させてしまっていることは、非常にもったいない。すきま展では、「わからないこと」にどれだけ細く長く向き合い続けることができるか、そして自身の日常の中にその問いをどこまで包摂することができるのか、ボランティアとは「わからない」ことを解決し、答えを出すことなのだろうか、等々の問いを、常設展という形によって日常的に向き合う機会になることを期待した。前もって説明をしたり「わかりやすい」環境を整えて実施したりした企画ではなかったため、このアート展を読み解くことは難しいかもしれない。しかし敢えて整えず、最初から全ての形を決めずに縦横無尽にアートする手法を試みたことは、ボランティアという「わからない」問いに向き合うのには相応しいものだったと考える。また今回、白金ボラセンにとって大きな収穫だったのは、学外者という第三者の視点で白金ボラセンを一定期間観察していただけたことである。その一端は、本書42ページに掲載している仮屋崎氏のイラスト集から考察できる。普段、我々教職員や学生たちが無意識に過ごしているセンターの中で、外部の方の眼にとまるポイントを知ることは、非常に新鮮で刺激的だった。そして今の白金ボラセンにあるものとなないもの、一見「必要」なものや「無駄」で「不要」なものが、我々の心にどれだけの存在感として潜在的に根を下ろしていたのかなど、改めて気づかされたこともたくさんあった。この企画は何らかの意識を持つ人々が多く集まる白金ボラセンという場所で行ったので、今回は前述した観客の2つのタイプのうち、後者のタイプの参加が圧倒的に多かった。今後はこの限界を超えるべく、そしてこのような企画を大学という場で実践できたことに感謝しながら、その意味と可能性を更に広げる工夫を重ねて、ぜひとも次回のすきま展実現を目指したい。

次に、トークイベントについて報告する。この企画は、白金ボラセンが目指す「学生、教職員、そして外部の方々が広く集い共に夢を語る場所」の実現を模索する試みとして実施した。昼休みを利用した企画だったが、白金校舎の昼休みは40分という短さであるため、実質30分で行われた。時間を自由に

活用してもらう以外にスピーカーの参加条件はなかった。聴衆は誰でも参加・出入り・飲食自由とした。そして毎月スピーカーの名前と所属、トークタイトルを書きこんだカレンダーをホームページや掲示板、学内ポータルサイトなどで広報した。スピーカーの内訳は、学生15名（複数でのプレゼンもあったが、1回につき1名とカウント）、教員1名、職員5名、学外者4名であり、実施回数は合計25回であった。トーク内容は、自身のボランティア体験を語るものだけではなくなかった。例えば、広報課、国際交流センター、キャリアセンター、地域連携推進室などの学内事務職員らは、部署の説明に加え、自身の学生時代の体験やボランティア観、学生に対する想いなどを織り交ぜながら語った。また、インドネシア伝統文化のガムランを映像や音楽を交えて紹介した職員もいた。学生のトークでは、写真を投影しながら日本や海外での体験を話す者がいたり、話すことが苦手なのでとよさこいを踊る者がいたり、郡上踊りの免許を持つ学生の時は5分程度プレゼンした後に、実際にてほだきをして最後は参加者全員で輪になってグルグル踊った。平日のお昼という悪条件から学外者の参加は難しかったが、本学の卒業生やNPO主宰者などが参加してくれた。このような多種多様な参加者と内容で行われたこの企画は、小さなセンター内で昼食をとりながら行ったため、参加者全員の距離は近く、質疑応答もざっくばらんに行われ、大いに盛り上がった。こうして日常的に白金ボラセンの隙間を活用した結果、拡張からわずか2、3ヶ月でリニューアル感はすっかり無くなり、既に手狭になってきた。そして、日々のコミュニケーションの蓄積によって、学生スタッフ、教職員、地域と実態を伴ったつながりが構築された。それが形として現れた一例が白金合コン（詳細は30～31ページ参照）だろう。学生だけではなく地域や学外の方の訪問も増えたことで、学生は交流の幅が広がったり、白金地域であいさつを交わす相手が増えたりした。地道な蓄積と言えば、今年度は白金学生スタッフのホームページが完成し、活動ニュースを活発に更新したことも挙げられる。ボランティアセンターのホームページのメニューの中の一つであるにも関わらず、2009年5月29日から白金のページに設置したアクセスカウンターは2653（2010年1月26日現在）を数えた。このように多様な仲間が増えたことで、今後の活動の幅が広がる可能性を大いに感じる事ができた2009年度だったが、来年度から新生は全員横浜校舎在籍になるなど、今後の活動に不安がないわけではない。しかし先の見えない時代だからこそ、いかに見えない希望を見出せるかが問われる。そして自分自身で考える力、決定する力、責任を持てる力が一層求められるだろう。また、日々の蓄積とつながりの価値を感じるだろう。今年度は昨年度卒業したOBらが年間を通してふらっとやってくるという面白い現象が続いた。初対面の後輩たちとも違和感なく接しているのは、両者が無意識に根本はつながっていると感じているからではないだろうか。そしてそれは白金ボラセンが大きく変わり発展した4年間の苦楽を共にしてくれた今年度の卒業生たちにも受け継がれている（詳細は本書37～40ページ参照）。150年近い伝統を持つ本学ならではの、そして新しい伝統が白金ボラセンにも現われてきたことをうれしく思う。来年度も、このような現実と課題に向き合える仲間たちと共に汗を流しながら、希望と可能性というつながりの輪が広がっていけるセンターを目指していきたい。（李）